

さんはすぐに玄関へ向かった。息子たちが帰ることを感じとっていた。3人が乗り込んだ車が見えなくなるまで、玄関でスタッフと一緒に見送った。

「家にいた時はきまきまとしていたのに、別人のよらに穏やかになった」と息子さんは言う。

「平穏な最期」がどんなものかまだよくわからない。この先、治る見込みのない病気が母に見つかったら、「積極的な治療はせず、なるべく今の場所です」と思っている。

にしたい」と話す。(南奏美)

記者より
追伸

少し前まで日本では病院での最期が当たり前だったけれど、今は制度も世論も「在宅での最期」を後押しする方向に向かっていく。患者本人が望み、必要な環境が整えばそれは素晴らしいことだと思つた。

ただ、必ずしも在宅だけが正解とは限らない。病院も施設も自宅もそれ以外の場所も、本人や家族が心地よいと感じる場所なら、どこでも「わたしのらしい最期」は実現できる。取材を通して感じている。(南)